

第9回小さいとこサミット in 大東

大東市立歴史民俗資料館学芸員
 河島 明子

1. はじめに

「小さいとこサミット」(以下、サミット)は、小規模ミュージアムネットワーク(以下、小さいとこネット)と開催館が主催する、情報交換や交流を主な目的とした集まりである。小さいとこネットは、日常的にはメーリングリストでの交流を行っており、そのはじまりは平成22(2010)年に芥川緑地資料館(現高槻市立自然博物館)が行った第1回にさかのぼる。小さいとこネットの立ち上げやこれまでのサミットについては、同館の高田みちよ氏による論文が詳しい^(注1)。

サミットは、開催館が自らの課題を解決し、よりよい方向へすすむ契機として位置づけられている点が特徴である。サミットのテーマやプログラムは、開催館の職員と小さいとこネットの世話人が開催館の特徴や課題を尊重しながら話し合っ

て決めている。このたび、大東市立歴史民俗資料館(以下、資料館)は、第9回目の開催館となった。日程は平成30(2018)年2月16日、17日の2日間で、1日目に事例紹介や交流をメインとしたサミットを、2日目にエクスカージョンと小さいとこネットの協力を得た一般向けのイベントを開催した。本稿はこれらの報告である。

2. テーマ「小さいからできる!?ミュージアムと“じゃないとこ”との連携」

今回のサミットでは異業種連携をテーマにした。大阪府東部に位置する大東市には、中小企業や商店が多数あり、資料館では彼らと数々の連携を行ってきた。スタッフ数の少ないミュージアムにとって外部を巻き込むことは、充実した展示の制作や多角的な調査を実現する一つの方法であるが、それだけでなく地域の一員として存在や専門性を認めてもらい、ともに地域を盛り上げたり、問題点を探っていくことができるという点で連携の重要性を実感していた。資料館として、サミットという大舞台でこれまでの連携を発信するとともに、関わる企業や商店の人たちが、資料館以外のミュージアムに出会い、つながりを広げる機会にしてもらおうことで、資料館及び企業や商店の双方が発展する契機にしたいと考えたのである。

異業種連携の事例については、参加者からも募った。プレゼンテーションのみ7件、ポスターのみ7件、両方が6件と

【1日目】 2月16日(金)		サミット	会場:大東市立総合文化センター(サーティホール) 小ホール
	12:30~13:00	開場・受付	
	13:00~13:05	開会のあいさつ	大東市立歴史民俗資料館 笠井敏光
	13:05~13:15	主旨説明	あくあひ芥川(高槻市立自然博物館) 高田みちよ
	13:15~13:20	テーマ説明	大東市立歴史民俗資料館 河島明子
第一部	13:20~13:50	話題提供 「地域の中の“博物館の子カラ”」	新潟県立歴史博物館 山本晋也
	13:50~14:20	事例紹介1 「地元企業と資料館の出会い～金型メーカーとだんじり調査をすまで～」	大東市立歴史民俗資料館 武井二葉
	14:20~14:50	事例紹介2 「藤屋十字の思考を創る～ウミガメ用人工ヒレ開発プロジェクトでの出会いから～」	川村義株株式会社 川村 慶 ないわホネネ団・NPO 法人大阪自然史センター 西澤真樹子
	14:50~15:00	休憩、ポスター発表ほか	
第二部	15:00~15:30	“じゃないとこ”をやってみたよ!～連携事例紹介タイム～	進行:近畿大学 図師宣忠
	15:30~15:45	休憩、ポスター発表ほか	
第三部	15:45~17:00	“じゃないとこ”はじめよう!～交流タイム～	進行:ないわホネネ団・NPO 法人大阪自然史センター 西澤真樹子 絵 Creation 北村美香
	17:00~17:10	総括	吹田市立博物館 五月史実司

【2日目】 2月17日(土)		エクスカージョン・一般来館者向けイベント	会場:大東市立歴史民俗資料館
	9:30~10:00	開場・受付	
午前部	10:00~12:00	エクスカージョン「実践の現場を見に行こう!～ミュージアム&工場見学～」	
	12:00~13:30	休憩	
午後部	13:30~16:00	一般来館者向けイベント「あきみんカーニバル with 小さいとこネット」	

プログラム



サミット

いう、予想を上回るエントリーがあった。サミットでは第3回からポスターセッションを設けてきたが、プレゼンテーション形式は今回が初めての試みだった。参考程度の数字でしかないが、サミット後の小さいとこネット（メーリングリスト）への登録希望数で比較すると、前回は4名だったのに対し、今回は16名であり、初参加の人が多かったのは、能動的に参加できるテーマと仕組みに要因があったのではないだろうか。エントリー時に「はじめてなので自己紹介もかねて」という声もあったことから、交流のきっかけとしても機能したと推測している。

3. プログラムと内容

1日目 サミット

サミットには例年100名近い参加者が集まる。資料館にはこれを受け入れる施設がないため、市内の文化ホールを会場にした。今回のサミットにも、資料館のスタッフを含めた104名の参加があった。

第一部は話題提供と2件の事例紹介を行った。話題提供には、山本哲也氏（新潟県立歴史博物館）を招いた。山本氏は全国各地のミュージアムを多数訪れており、資料館にも度々足を運んでいる。講演では、ささやかながらも発見に満ちた展示の工夫を紹介しながら、東日本大震災でミュージアムが失われたことを例に、存在そのものが地域の“チカラ”となるという、小規模ミュージアムに関わる私たちが勇気づける内容だった。

続く2件の事例紹介のうち、武井二葉氏（大東市立歴史民俗資料館）からは、平成28年度に行った企画展をきっかけにはじまった地元の企業や商店との連携と、金型メーカーと行うだんじりの調査について発表があった。なお、2日目のエクスカッションでは、この金型メーカーを訪れた。

さらにミュージアムではない側の視点として、川村慶氏（川村義肢株式会社）によるインタビュー形式の発表があった。同社は大東市を代表する企業の一つである。水族館関係者や大学の研究者等とともに行ったプロジェクトを例にして、専門性が交流する面白さを経営者の視点から指摘した。

第二部「“じゃないとこ”とやってみたよ！～連携事例紹介タイム～」では、13件のプレゼンテーションがあった。大学と開発した教育プログラムや、地元企業とのコラボレーションで生まれたグッズ等が異業種連携の事例として挙げられた。短い時間にアイデアやノウハウが凝縮されていた。事後アンケートでも「多数の事例を聞けてよかった」「できるかもと思った」というコメントが目立ち、参加者の満足度も高かった。ただ、当初のプログラムでは30分間を予定していたが、大幅に時間が超過した。第三部のプログラムにまで影響したことは反省点である。

第三部「“じゃないとこ”とはじめよう！～交流タイム～」は、参加者同士の交流をねらいとした。資料館とつながりのある企業の製品や技術等を紹介した後、企業の担当者も加わり、実物を見ながらざっくばらんに意見を交わしつつ、参加者は連携のアイデアをワークシートに記入した。本来はこのワークシートをもとにグループワークを行う予定だったが、時間が足りなかったことから、ワークシートをサミット後にシェアすることにした。

五月女賢司氏（吹田市立博物館）による総括では、2019年9月に開催するICOM京都大会の話題にも触れ、小規模ミュージアムの存在を積極的に発信していこうと呼びかけ、サミットは締めくくられた。

なお、会場には参加各館のグッズが並ぶ特設のミュージアムショップが開店された。グッズ開発の経緯等を記したメモとともに陳列されており、情報交換の場になっていた。

2日目 エクスカッション・一般来館者向けイベント

午前中のエクスカッションの前半は、資料館の学芸員が収蔵庫や展示室等を案内した。市民学芸員



エクスカッション（金型メーカー見学）

も案内役として参加し、資料整理や展示制作等の成果を紹介しながら、その関わりにも触れた。後半は資料館から徒歩数分の明星金属工業株式会社へ場所を移した。同社は、自動車のパーツを生産する金型製作を主軸事業としている。工場見学を通して、その精巧な技術や3Dプリンタを用いた資料館との連携について、代表取締役である上田幸司氏から説明があった。



一般向けイベント「れきみんカーニバルwith小さいとこネット」

午後は子ども向けのプログラムを集めたイベント「れきみんカーニバル」を開催した。資料館で平成27年度から毎年開催している事業である。今年度は小さい

とこネットを通じて事前に出展を募ったところ、7団体からエントリーがあった。植物や生きものをテーマにしたプログラムのほか、資料館とは異なる工夫が凝らされた歴史・民俗系も充実していた。多種多様なプログラムが集まったおかげで約400名の来場者があり、開場前には列ができ、順番待ちのプログラムもあるほど館内はにぎわった。ミュージアムショップも1日目に引き続き開店した。

4. まとめ

今回のサミットは、はじめて参加する人や、ミュージアム関係者以外の参加者が目立った点が特徴と言えるだろう。前者については、サミットの認知度がますます上がっていることを示しているのではない。また後者は、資料館ならではのサミットが開催できた成果と満足している。開催館として、これまでつながりをもってきた企業等の人たちが20名程度参加していた。全国規模で多くの人が注目するサミットを通して、新たな知見を得たり、何らかの可能性を感じたりしてもらえたことは成果だった。ある企業は、サミットで交流したミュージアムとともに新商品の開発を検討していると聞く。

2日目の一般向けのイベントも資料館としての成果である。これほどのプログラム数や集客できるイベントを資料館単独で運営することは難しいが、それだけが連携の成果ではない。資料館の近隣に住む人たちが、資料館ではないミュージアムと出会い、新たな興味や関心に気付く機会を提供することができた。また、資料館がこれほどの数の人たちの心を動かす余地があると知り、希望を持つことができた。

一方、事後のアンケートは、満足したという声ばかりではなかった。「全体的に時間が少なく残念だった」という意見が多数あり、開催館の希望を詰め込み過ぎてしまい、参加者の交流に十分な時間をもっと割く必要があった。開催館のメリットと、参加者の満足度を両立していくことは今後のサミットの課題の一つだろう。

最後に、事前の打ち合わせから当日の運営まで、世話人のみなさまには多大なサポートをいただいた。厚く御礼を申し上げたい。正直なところ、小規模なミュージアムが行う業務としては、サミットは規格外のイベントであるというのが実感である。本当の意味で窮地にあるような小さなミュージアムでは開催が難しいかもしれない。しかしながら、参加者はもちろん、参加できない小さいとこネットのメンバーからも励ましの言葉をたくさんもらい、通常業務では味わえないとても良い経験をさせていただいたと思っている。参加はもちろん、開催館となることもぜひおすすめする。

(かわしま・あきこ)

注

1) 高田みちよ (2016)「小さかったら集まろうー小規模ミュージアムネットワーク (小さいとこネット) について」『博物館研究』vol.51, no.7, 11-14

※参考URL

・大東市立歴史民俗資料館 <http://www.rekisupo.com/reki.html>
・小規模ミュージアムネットワーク <http://chiisaitoko.web.fc2.com/>